ペット媒介の感染症

みずほ台動物病院院長
兼　島　　孝
（聞き手　池脇克則）

ペット（小動物）が媒介する感染症について実地臨床で気をつけるべき点があればご教示ください。

＜兵庫県開業医＞

池脇　兼島先生、ペットブームということで、犬、猫を中心として、最近は様々なペットをお飼いになって、ペットも多様化しています。したがってペットを介した感染症も多様化しているという意味では、動物由来感染症が問題だと思うのですけれども、まず簡単に最近のペットの動向を教えてください。

兼島　犬、猫の総数は2000年には約1,600万頭で徐々に増え、現在約2,200万頭ぐらい飼われています。15歳未満のお子さんたちは2000年には約1,800万人でしたが、少子化の影響で減り続け、2003年には逆転して、今は犬、猫のほうが多くなっているという状況になっています（**表**）。

池脇　これはすごいとしか言いようがないですね。やはりペットも多様化しているのでしょうか。

兼島　昔は犬と猫がメインでしたが、最近は、小鳥も多くの家庭で飼われています。あとは意外に多いのが、小学生のお子さんたちが飼っているは虫類です。小さな子どもは小動物が好きなので、は虫類を飼う家庭も増えています。あと、若い20代、30代の人では、エキゾチックアニマルといって、あまり見ないようなトカゲや、変わったカメ、あとはフェレットなどを飼育し、いろいろな動物が動物病院に来院しています。

池脇　飼っている方たちは、まさか感染症が起こるなどということは考えもしないと思うのですけれども、動物由来感染症というのは、かまれる、引っかかれるといった直接的なものと、間接的なものがあるかと思いますが、

表　国内の犬猫の総数と子どもの数

単位：千（頭、名）

	犬飼育数				猫飼育数（外猫除く）				犬猫総数	子どもの数（15歳未満）
西暦	純粋犬	雑種犬	種不明	犬合計	純粋猫	雑種猫	種不明	猫合計		
2000	4,746	＜4,772	536	10,054	579	5,384	575	6,538	16,592	18,580
2001	**5,093**	**＞4,225**	550	9,867	834	5,181	584	6,599	16,466	18,340
2002	5,240	3,713	570	9,523	808	4,826	569	6,203	15,726	＜18,170
2003	5,805	4,312	1,020	11,137	599	5,358	1,005	6,962	**18,099**	**＞18,010**
2004	8,559	3,898	—	12,457	1,502	8,867	—	10,369	22,826	17,810
2005	8,857	4,211	—	13,068	1,531	8,554	—	10,085	23,153	17,650
2006	8,708	3,381	—	12,089	1,361	8,235	—	9,596	21,685	17,470
2007	8,921	3,601	—	12,522	1,802	8,387	—	10,189	22,711	17,380
2008	9,904	3,197	—	13,101	1,960	8,930	—	10,890	23,991	17,250
2009	9,774	2,548	—	12,322	1,807	8,214	—	10,021	**22,343**	**17,120**

出典：ペットフード協会　犬猫飼育率全国調査※（http://www.jppfma.org/）、統計局
※2004年よりインターネット調査を採用のため、前後の比較は参考値

その基本的なところを教えてください。

兼島　今、ほとんどの動物が家の中で飼うようになっていて、人間と動物の接触頻度が非常に高くなっています。この10年は特に高くなってきていますので、接触で起こる感染症が増えています。家の中で飼うことによって、例えば小鳥ですと、羽毛やふん塵を、小鳥が羽ばたいたことによって飼い主が吸ってしまいます。また、カメですと、食中毒菌のサルモネラ症が問題になっています。それをお母さんたちがあまり気を遣わず、食事をつくる台所でカメの水槽の掃除をして、そこからうつるということも最近は増えています。

池脇　ペットとの距離が以前に比べてだいぶ近くなってきたというのも、そういった感染症が増えている原因の一つだということですが、兼島先生は動物を診ておられて、実際に感染した患者さんを診るのは基本的には人間を診る医師ということなのですけれども、どの科の先生が主に診ておられるでしょうか。

兼島　今お話ししたように、動物からの接触感染が非常に多いので、皮膚糸状菌症が一番多いかと思います。そうしますと、動物にも同じような皮膚病、飼い主さんも全く同じような皮膚病変が出ますので（**図**）、まず動物病院に飼い主さんが動物を連れてこられて、これは皮膚糸状菌症だとわかったときに、飼い主さんに「飼っている方もそういう皮膚病はないですか」と一

図　皮膚糸状菌症（境界明瞭な環状紅斑）

下肢露出部の病変

写真提供：杉山獣医科 杉山和寿先生（静岡県）

言聞きますと、「うちの娘がある」とか、そういう話になります。そうしますと、近くの皮膚科に行って、動物が皮膚糸状菌症なので、飼い主さんも治療を受けてくださいという話をして促しているような状況です。

池脇　今の場合には先生のほうが家族にというか、患者さんに指導して、皮膚科に行きなさいということなのですけれども、全く原因がわからずに、患者さんのほうが皮膚科に行くということもあるわけですね。

兼島　そうですね。そのときに、動物の飼育歴を患者さんから言わないと、こじれる場合があります。例えば、アトピー性皮膚炎という診断になってしまって、ステロイドを使って逆に悪化させてしまう。そういう状況も何例か今まで見ています。

池脇　ほかの感染症に移る前に、皮膚糸状菌症の治療は、具体的には抗生物質ということになりますか。

兼島　抗真菌薬を使います。ヒトと全く同じように使って、あとは飼育環境を変えてもらいます。湿度が高いと皮膚病変はひどくなるので、水槽で飼っていたら、もう少し風通しをよくしてくださいとか、意外に劣悪な環境で飼われている場合が多いので、飼育指導をしています。

池脇　これはほかの感染症でも言えることでしょうけれども、診断がついて、治療するとなると、医師と獣医の先生方が連携することが必要ですね。

兼島　一番それが大切だと思っています。動物も治せますので、きちんと治して、患者さんもハッピーになって、動物もハッピーにしたいなと思っています。

池脇　皮膚科の先生以外には、どういう科の先生が多いのでしょうか。

兼島　次に多いのは内科でしょうか。例えば不明熱などのときに、動物を飼っている患者さんが、動物を飼育しているということを内科の先生におっしゃったときに、お医者さんがぴんと来る場合もあります。あとはかまれるということですね。猫ですと、引っかかれたりなどすると、外科の先生のところに行かれるかなと思います。

池脇　不明熱というのは、成人でも起こるし、子どもさんでも起こるということで、成人の場合には内科に、子どもさんの場合には小児科に行かれる。これも背景としてペットがいるということがわからないと、医師サイドはなかなか診断がつかないような気がしま

すけれども。

兼島　そうですね。例えば、Q熱には一般的な抗生物質が効かず、キノロン系でないと効きません。ですから、医師がQ熱を疑わない限り治療がスタートできないので、やはりこじれるというパターンが多いというふうに聞いています。

池脇　ひっかき、あるいはかむ、これは外科ということになりますけれども、具体的にはどういう感染症が起こるのでしょうか。

兼島　一番多いのは、かまれることによって起こるのはパスツレラ症です。パスツレラ症のパスツレラ菌は、犬ですと、正常細菌叢として約75％ぐらいの犬の口の中にいますし、猫ですと、約100％、ほとんどの猫の口の中にいます。そのパスツレラ菌が、体力の弱った、免疫力の落ちた人たちに侵入すると、そこが化膿してしまうのです。大したことない傷だと思っていても、だいたい24時間以内に激烈に痛み、腫れてきますので、大あわてで病院に行かれる方が多いです。

池脇　けっこう発症は急激なのですね。

兼島　そうですね。あと、猫ひっかき病という病気はバルトネラ菌で感染します。猫ひっかき病は、ヒトではだいたい２週間後ぐらいに所属のリンパ節が腫れてきます。ですから、時間が経過しているので猫に引っかかれた傷のことを忘れてしまっているのです。それで、原因不明でリンパ節が腫れたということで、リンパ節を取ってしまうというような事態が出てくることもあります。

池脇　本当にペットとの距離が近くなって、溺愛する。恋人のように接触する。それはおそらく自分の飼っているペットには、菌がないといったら変ですけれども、全くそういうものは予想もしていないのでしょうが、実際にはいろいろな菌が至るところに存在していると考えないといけないということですね。

兼島　そうなのです。飼っている方は「うちの子は大丈夫」と思っていて、動物とキスをしたり、動物と一緒のおはしでごはんを食べたり、一緒のベッドで寝たりというふうに、動物を恋人のように思っている人が非常に多いですね。

池脇　それ以外の感染症として、一般の実地の先生方が気をつけるべきものというのはありますか。

兼島　先ほど、子どもさんの病気の話をしたのですが、年配の方にうつる病気として代表的なのはオウム病です。オウム病は、クラミドフィラという菌からうつります。だいたい45歳以上の人たちに発症しやすい。これもやはり不明熱だとか、抗生物質も通常のものは効きにくいので、なかなか治りにくいという形で起こっています。日本で

の発生は、感染症法でお医者さんのほうには届け出の義務があるので、そのデータを見ると、年々増えています。

池脇　オウム病というのは、ペットでは何が多いのでしょうか。

兼島　小鳥です。一番事例として多いのは、セキセイインコという小さな鳥です。

池脇　最近、は虫類が多いということで、以前は飼わなかったようなもの、要するに得体が知れないものには得体の知れない感染症がある。

兼島　そのとおりです。

池脇　それが非常に危険な感染症もあると思うのですけれども、そういったことで最近問題になっていることはありますか。

兼島　最初のころに話しましたが、は虫類で非常に心配なのはサルモネラ菌です。これは幼児に関しては死亡例も出ています。は虫類は、ほとんどが野生をつかまえてくることが多かったり、海外から輸入されるものも多いので、は虫類のサルモネラ汚染に関しては非常に気を遣わないといけないかなと思っています。

池脇　次に狂犬病は致死率が高い病気で、これに関しては、日本では比較的少ないとは聞いていますけれども、どうでしょうか。

兼島　狂犬病に関しては、狂犬病予防法という法律がありまして、飼い主さんには狂犬病予防注射の登録の義務があって、幸い日本国内では50年以上発生していないです。しかし、アジアではいまだに狂犬病は発生していますし、2006年には60歳代の男性が２人、横浜の方と京都の方がフィリピンでかまれて、日本で発症して死亡しています。国内では安心でも海外は危険という認識が低いので、発症すると100％死亡する狂犬病に関して、さらに注意が必要になると思います。

池脇　ヒトの側に感染症が起こると、場合によってはペットを処理してくださいということもあると聞いていますけれども、ちょっとかわいそうですね。

兼島　そうですね。狂犬病以外の動物由来の感染症は、ほとんど治すことができますので、私の立場としては、ヒトも治して、動物も治す、治療する。それで幸せに暮らしていってもらいたいなと思っています。

池脇　ありがとうございました。